

生活文化フォーラム



生活文化フォーラムについては、
つぎの各企業のご協賛をいただいています。

株式会社イトーキ

株式会社オンワード樫山

株式会社資生堂

株式会社鈴屋

株式会社第一勧業銀行

株式会社東急エージェンシー

株式会社レナウン

殖産住宅相互株式会社

東陶機器株式会社

東レ株式会社

H O Y A 株式会社

設立の経緯と目的

生活文化フォーラムは、通商産業省生活産業局長の諮問機関であった「生活文化と産業を考える懇談会」のメンバーを中心に、これからの生活文化の方向について自由に議論し、提案し、さらには生活文化に関心を持つ人々とひろく対話を重ねるため、1985年11月に結成された任意団体です。

現在、加藤秀俊を代表として18名の学者、建築家、デザイナー、作家などによって構成されています。

協賛企業の代表の方々や通商産業省生活産業局長ほかの方々と定期的に研究会を開催し、今後の生活文化の形成について討論したり、それをもとに提言を行ったり、各地におけるシンポジウムの企画・開催を行なっています。そのほか新しい生活文化形成への動きを支援する多面的な活動を行なっていく予定です。

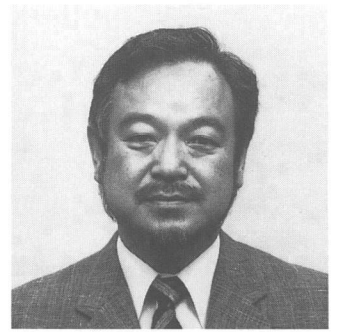
生活文化フォーラムメンバー紹介



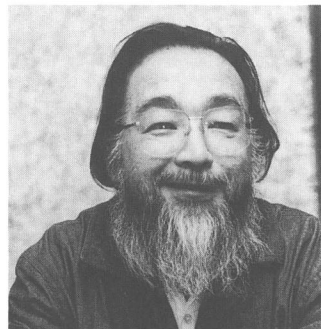
栗津 潔 あわづ きよし
法政大学専門部中退
現在 グラフィックデザイナー
〔著書〕「デザイン巡遊」栗津 潔の仕事
1949-1989」他
〔受賞〕1980映画「夜叉池」美術部門 日本
アカデミー賞
1987映画「槍の権三」美術に対して
日本アカデミー優秀賞
1990紫綬褒賞



石井 幹子 いしい もとこ
東京芸術大学美術学部卒業
現在 照明デザイナー
(株)石井幹子デザイン事務所代表取締役
〔作品〕東京タワー、横浜ベイブリッジ他多数
〔著書〕「環境照明のデザイン」「光のデザ
イン」他
〔受賞〕北米照明学会より最優秀デザイン
賞、特別賞 他多数受賞



石毛 直道 いしげ なおみち
京都大学文学部卒業
現在 国立民族学博物館教授
〔著書〕「面談 食べもの誌」「魚醬とナレズ
シの研究」「はじまりはトンガ」
「食事の文明論」「食いしん坊の民
族学」他多数



泉 眞也 いずみ しんや
東京芸術大学美術学部卒業
現在 環境デザイナー、プロデューサー
〔プロデュース作品〕EXPO'90総合プロデ
ューサー、森ビル「ラ・フォーレ原宿」ア
ートディレクション、自然保護シンボルマ
ーク作成、他
〔著書〕「核兵器と遊園地」他
〔受賞〕クリエイティビティ賞(USA)、
世界道路映画祭金賞、他



榮久庵 憲司 えくあん けんじ
東京芸術大学美術学部卒業
現在 インダストリアル・デザイナー、
(株)G Kデザイン機構代表取締役会長
〔著書〕「台所道具の歴史」「仏壇と自動車」、
他
〔受賞〕I D S Aより世界デザイン大賞、
他多数



大沼 淳 おおぬま すなお
海軍兵学校修了、人事院勤務を経て
現在 文化学園理事長
通産省ファッション産業人材育成
懇談会委員、他
〔受賞〕1990日本文化デザイン会議賞「企
業文化デザイン賞」他
1984藍綬褒賞



(代表) **加藤 秀俊** かとう ひでとし
一橋大学大学院修了 京都大学助教授、学
習院大学教授等を経て
現在 文部省放送教育開発センター所長
〔著書〕「加藤秀俊著作集 全12巻」「人生に
とって組織とはなにか」他多数



樺山 紘一 かばやま こういち
東京大学文学部卒業
現在 文部省放送教育開発センター教授、
東京大学文学部教授
〔著書〕「都市へのまなごし」「情報の文化
史」「歴史のなかのからだ」
「ルネサンス道遠」他多数



菊竹 清訓 きくたけ きよのり
早稲田大学理工学部卒業
現在 建築家・菊竹清訓建築設計事務所
主宰
〔作品〕川崎市市民ミュージアム、
現在東京都江戸東京博物館計画進
行中、他多数
〔著書〕「作品集1」「人間の建築」「人間の
都市」「人間の環境」、他多数
〔受賞〕第8回オーギュスト・ペレー賞、
第31回建築業協会賞、他多数



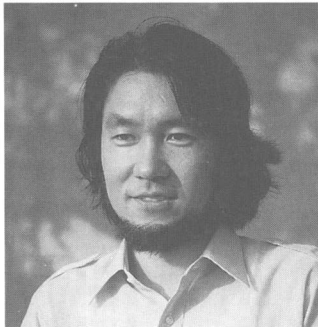
栗田 靖之 くりた やすゆき
 京都大学大学院卒業
 現在 国立民族学博物館教授
 [著書]「ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性」
 「日本人の人間関係」他多数



小松 左京 こまつ さきょう
 京都大学文学部卒業
 現在 作家、プロデューサー
 EXPO'90総合プロデューサー
 [著書]「日本沈没」「復活の日」「虚無回廊」他多数
 [受賞]1990大阪文化賞



島田 晴雄 しまだ はるお
 慶應義塾大学大学院卒業
 ウィスコンシン大学労使関係学博士取得
 現在 慶應義塾大学経済学部教授
 [著書]「労働経済学」「ヒューマンウェアの経済学」「日本企業：次なる変革」他多数
 日本経済新聞に毎月時評コラム「経済論壇から」執筆中



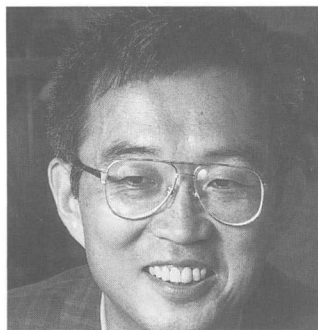
陣内 秀信 じんない ひでのぶ
 東京大学大学院修士
 現在 法政大学工学部教授
 イタリアを中心に、イスラム圏を含む地中海世界の都市の特質の研究
 [著書]「都市のルネッサンス」「東京の空間人類学」他多数



高原 須美子 たかはら すみこ
 一橋大学商学部卒業 第一次海部内閣において経済企画庁長官就任を経て現在経済評論家
 [著書]「男性経済論への挑戦」「エイジレスライフ」「いきなり大臣」他多数



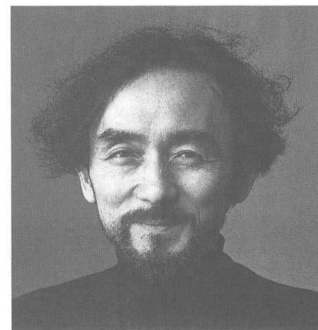
竹内 弘高 たけうち ひろたか
 国際基督教大学社会科学科卒業
 カリフォルニア大学バークレー校卒業
 現在 一橋大学商学部教授
 [著書]「企業の自己革新」他



月尾 嘉男 つきお よしお
 東京大学工学部卒業、名古屋大学教授を経て現在 東京大学工学部教授
 世界デザイン博覧会施設計画プロデューサー
 [著書]「情報化時代のビジネス環境」「ポスト情報社会の到来」他多数



樋口 敬二 ひぐち けいじ
 北海道大学理学部卒業、名古屋大学教授を経て現在 中部大学教授・名古屋大学名誉教授
 [著書]「地球からの発想」「新しい日本を創る」他多数
 [受賞]日本気象学会賞、日本雪氷学会学術賞、秩父宮記念学術賞 他



山本 耀司 やまもと ようじ
 慶應義塾大学法学部卒業、文化服装学院卒業 現在 ファッション・デザイナー
 株式会社ワイズ、株式会社ヨウジデザイン代表取締役社長
 1990 リヨン・オペラ衣装デザイン他

これまでの歩み

1985年度 昭和60年

「美しく楽しく価値のある暮らしを創るために」をテーマに話し合い、より美しく、より楽しく、より価値のある暮らしを創るためには、生活にかかわるあらゆる分野で、新しいライフスタイルの提案が行なわれ、トータルな生活文化の変革が行われるべきであるという認識に達し、1986年5月、「生活文化ルネッサンスへの提言」として発表しました。（この小冊子に再録しました。）

1986年度 昭和61年

「デザイン＝ファッションの視点」をテーマに話し合い、生活文化を構造化するデザインと、生活文化に輝きと彩りを生み出すファッションが不可分なものとして展開するとき、生活者の共感と共鳴を得て、新しいライフスタイルが創造されるという認識に達し、そのための活動拠点の設置、ニューメディアの活用、世界デザイン博覧会の開催などを提言しました。

1987年度 昭和62年

「生活文化と情報——ゆたかな情報環境をもとめて」をテーマに話し合い、豊かな生活を創造するためには、そのための提案を行なう供給側と、それらを自由に選択し活用する生活者側との相互情報交流を盛んにすることが必要であり、そのためには供給側の情報を集積すること、それらを選択・整理するコーディネーターをおくことが必要であるという認識に達し、それを提言としてまとめました。

1988年度 昭和63年

「ひとの動きと生活文化——しなやかなモビリティ・ライフの創造にむかって」をテーマに話し合い、現代社会では、人・

生活文化フォーラム 名古屋

昭和61年9月10日 主催：名古屋市
「デザイン都市を目指して——
今、感性への旅立ち」

生活文化フォーラム 富山

昭和63年2月5日 主催：富山県
「雪国の生活ルネッサンス——
魅力ある雪国を考える」

物・情報の移動が大量化、長距離化、高速化、多様化してきたが、それに加えて移動を「快適化」することが必要であり、そのために企業は新しい商品やサービスの開発、生活者は移動にともなうマナーの向上がもとめられている、という認識に達し、それを提言としてまとめました。

1989年度

平成元年

「やすらぎの生活環境をもとめて——アメニティを考える」をテーマに話し合いました。アメニティというのは、環境条件が利便性、安全性、快適性、公共性にめぐまれ大変好ましいということですが、どの範囲の環境を思いうかべて語るか、快適ということ個人個人の五感のレベルで考えるか、歴史的・文化的レベルで考えるか、公共性についても、都市のレベルか地球のレベルか、内容が変わってきます。外国の学者もゲストに迎え、活発な議論を展開しました。

1990年度

平成2年

「21世紀初頭のライフスタイル」をテーマに、都市とすまい、経済環境と価値観、ファッション、食習慣についてメンバーがそれぞれ専門の立場から問題提起し、全員で議論するという形式ですすめてきました。

1991年度

平成3年

昨年度からの継続で、女性の社会進出、高齢化・情報化、地球環境異文化接触などの角度から、将来の生活文化のありかたを探ろうとしています。

生活文化フォーラム
三重

昭和63年10月5日 主催：三重県
「リゾート・イベントそして生活文化ルネッサンス」

生活文化フォーラム
愛媛

昭和63年11月25日 主催：愛媛県
「新しい瀬戸内をどうデザインするか——瀬戸内海自由時間都市の創造を目指して」

生活文化フォーラム
'89大阪

平成元年9月14日 主催：大阪府、大阪市、大阪商工会議所、(財)大阪21世紀協会、(社)トータルファッション協会
「商都ルネッサンスを考える」

生活文化ルネッサンスへの提言

なぜ、いまルネッサンスか

かつてヨーロッパ席捲した文芸の一大ムーブメント、文芸復興（ルネッサンス）の一語が、いまなお私たちの口をついて出るのは、このことばが深いロマンを秘めているからです。ルネッサンスの素晴らしさ、その真髄はどこにあったのでしょうか。

それは絵画、彫刻、建築、家具、工芸、服飾から文学にいたるまで、文芸の名で包括される創造的な営みのすべての分野がおたがいに影響しあい、輻湊しあい、こぞって壮大な文化変容をなすとげたことにありました。ルネッサンスの一語のもつ魅惑は、そのムーブメントによって時代の風景全体が刷新され、精神が生き活きと解放された、その時代変容の統合性（トータリティー）にあったのです。

時を同じくして日本では安土桃山の文化が花ひらきました。建築絵画の壮麗、衣装の華美、茶の道の静寂、みやびとわびの織りなす感性の時代がひらかれたのです。自由都市堺の繁栄、南蛮文化への熱中、洛中洛外の賑わいは、まさに日本版ルネッサンスでした。山崎の妙喜庵にはじまり醍醐の花見でしめくくられた桃山ルネッサンスは、きたるべき世紀のためにトータルな生活文化の再編成を、見事になすとげたのでした。

文芸復興を受け継いで地球文明のあらたな展開の突破口をひらいたのは産業革命です。そして二世紀余、このたくましい歳月は科学技術の人間生活への可能性の飽くなき試行についやされました。とくに、今世紀の後半は、産業にあってはコンピュータによる個性と感性の多様性に対応しうる生産・流通の変革を可能にし、社会生活にあっては交通・通信の飛躍的發展、そして家族生活の場面では家庭電化からその電子化へと、科学技術の可能性の、個の生活と都市への活用を試みる時代となりました。

いま、時代はまさに生活創造にかかわるあらゆる分野での試行がほぼ出そろった状況にあります。それぞれの可能性をたがいに活かしあって、統合的な新しい生活景観、精神の風土を創りあげていける、生活文化ルネッサンス前夜なのです。

個別の分野でひらかれた高度な可能性も、生活文化の望ましいあり方、という観点からみれば理不尽であったり、過剰であったり、不調和の部分が多々見られることも否めません。20世紀がつくりあげた成果を、トータルに活かし、21世紀に美しく、楽しく、価値のある生活文化を創りあげていくには、生活創造のかかわるあらゆる分野がおたがいに影響を与えあい、調整しあって相乗効果を生んでゆかねばなりません。

20世紀の生み出した諸成果はいま混沌として坩堝のなかに満ち満ちています。ここに効果的な触媒を投げこめば、それらが激しい相互反応によってトータルな生活文化の新しい結晶が析出するにちがいありません。時あたかも新しい世紀を目前に、みんながわくわくとして、きたるべき世紀のために何かをしたいと心を踊らせています。トータルな生活文化の変革をみちびくキーワードを投げこむ千載一遇の好機です。

生活文化ルネッサンスを提唱するゆえんです。

あらためて生活の質の向上を

いま、日本はあらためて生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)について真剣に考えるべき時期を迎えているように思われます。とくに、経済面では対外的発展よりも国内的充実により力を注ぐことが強く求められはじめました。生活そのものに目を向けると、衣・食・住のアンバランスがあるにしても、情報化・行動化の進展、余暇の増大、長寿化の進行、女性の社会的進出などの状況が、いわゆる高度大衆消費社会の段階をこえて新しいライフ・スタイルを求め、生活の質の高度化を図ろうとする気運を強くうながしています。

衣・食・住をはじめとして保健、学習、鑑賞、創作などの物心両面にわたる新しいライフ・スタイルの創造を生活文化の再発見と呼ぶこともできるでしょう。いま、生活文化は、それぞれの地域社会の風土、伝統、歴史などに根ざした個性をもちながら、世界史上空前の国際化の波のなかで相互に活発に交流しはじめました。日常の生活文化は一国の風格の源泉であります。生活文化の面での成功を通して「風格のある日本」を形成することがこんにちの日本の課題になっています。

近代化をこえて日本の独自性を

明治以来の日本の生活文化の変化をかえりみると、近代化、すなわち欧米追随型の「西欧化」が基調となり、機能性あるいは効率が重視されてきていたようです。いまや、そうした近代化の域をこえて独自の未来への道を進むことが求められつつあるように思われます。これが日本だけの問題ではないことは、世界の諸社会がそれぞれの文化的アイデンティティーを確立し、生活文化のイメージを再構築するという競争がはじまっていることに、よくうかがわれます。

日本人は、針供養、筆供養などにみられるように、物質世界にたいして機能性をこえた思い入れをもち、また、物を持ち、とり合わせ、使うことを通じて精神を充実させてゆくという伝統を持ってきました。その根底にあるのは鋭い感性と深い情緒でした。日本は、むかしから、この特性を基本に、ひろく世界の生活文化の諸要素を選択的にとりいれながら独自の生活文化を形成してきました。いま、日本は、現代的時点で、感性と情緒の復興を契機として、みずからと世界文明の達成してきた諸成果をトータルに活用することによって新しい生活景観と精神の風土を創りあげ、その評価を世界に問いかけることを求められているように思われます。

現代日本では、ひとりひとりの生活者がひろい選択の機会を生かして、美しく楽しく価値のあるくらしとそのための環境を創造し、生きがいを発見する時代を迎えているともいえましょう。こうした日本人の精神的エネルギーの発散のうごきを生活文化のルネッサンスと呼ぶこともできましょう。

ゆとりのある価値観

生活文化のルネッサンスを支える価値観の特色は、幅の広いゆとりであります。技術の進歩の成果を積極的に生活にとりいれてゆくという姿勢は必用不可欠ですし、近代化の過程で培われた効率的なシステムづくりの能力や日本の中小企業群がもつきめのこまかいクオリティの高さはこれからも大切にしなければなりません。

海外の文物に対する関心も国際化のひろがりにつれてますます高まることになりましょう。生活のなかに価値のあるもの、風格のあるものを創ってゆくには、世界の価値あるものを自らのふところに引き入れることが必要です。ゆとりは教養から生まれます。世界の生活文化、伝統文化にひろく触れ、その豊かさを観賞するチャンスをふやすことが大切です。

世界に触れることによって伝統を再評価することができます。単純な空間を生活者の知恵で多様に使いこなしたり、季節に応じて道具を出し入れして使い分けたり、変わってゆくものや古びてゆくものに価値を認めたり、部分よりも全体としてのありかたを重んじるといったことに代表される「型」、「風」、「道」といった日本固有の精神的価値を再認識することも重要ではないでしょうか。さらに、伝統工芸については、これを支える地域と人を含めた総合的な価値を尊重し、それを新しい日常生活のなかに生かし、展開してゆくことが急務であると思われまます。

また、変化の豊かな気候風土も日本の生活文化を規定する重要な条件であり、四季をたのしみ、また雪国の特性を積極的にとらえなおす工夫なども大切でありましょう。そうした努力の成果が必ずや世界のさまざまな地域で高く評価され、受け入れられるであろうことも、ここであらためて強調しておきたいと思ひます。

まさに、古今東西の諸文化の要素を共存させ、組み合わせ、総合するという作業にこそあたらしい日本の活路と将来が約束されているのではないのでしょうか。

デザインの意義、ファッションの役割

生活文化のルネッサンスの核はひろい意味のデザインであります。デザインは、機能性と感性の総合あるいは用と美の調和として、美しく楽しく価値のある暮らしを創るための基礎となるものであり、その重要性はますます大きくなることが予想されます。

生活文化のルネッサンスとは「21世紀の生活文化をデザインしよう」ということと同義なのです。20世紀がひらいたさまざまな可能性をもって生活文化をトータルに再編成し、諸々の可能性に適切な位置を与えていくところにデザインの大きな意義があります。その背景にあるのは、太古から培われてきた、形に表現される心を問い直すことであり、美の魂を問い直すことです。

とくに最近ではファッションデザインのジャンルがはなやかさを増しています。衣装を中心とするファッションデザインは、建築、住まい、インテリア、インダストリアルデザインをはじめとして食品やその包装など、その周辺に大きな影響を与えはじめています。生活文化ルネッサンスのロマンには、豊かな高い品位のファッション世界に彩られてゆく明日への期待もこめられています。デザインが生活文化を構造化し、ファッションがそれに彩りを与えていく役割を担っているのです。その意味で、現代の日本人は、それぞれの形で芸術活動に参加しているといつてさしつかえありません。

ときどきの時代感覚を彩り、多様な感性に呼応し、つねに精神を活性化し、ものの風景を新鮮化してゆくファッションは人間性の世紀、21世紀の基幹となるデザインジャンルのひとつとなると思われます。こんにちファッション化現象は力強い胎動を起こしているといえるでしょう。生活文化のルネッサンスはまずファッションデザインに兆したのであり、ここを起点に生活文化の統合的なデザインは起こされてゆくのです。

若者、女性、高齢者、家庭、地域の役割

生活文化のルネッサンスの旗手は若者女性でありましょう。とくに女性の役割はきわめて大きいと思われます。日本の生活文化は、もともと女性に担われている部分が大きかったことはあらためていうまでもありません。あわせて、人口の高齢化にともない、文化の質について豊かな経験と深い見識をもつ高齢者が果たすべき役割と、その潜在的エネルギーも、生活文化の高度な成熟のためには見のがしてはなりません。人間のおおきな歴史と人生の価値とを結びつけるのは高齢者の役割です。

生活文化の基本単位は家庭であり、これからの生活文化も家庭生活とその延長線上で展開されるものです。しかし、現代以後の住様式は都市型社会であり、それゆえにこそ都市における生活環境の再構築が必要になり、またコミュニティのあり方、小単位集団、二次集団の形態やあり方が問いなおされていかねばなりません。

地域社会についていうならば、日本の地域社会の文化は江戸時代まで健在でありました。そこにもこんごの生活文化の潜在的活力が眠っているはずで、これを再活性化することも可能でありましょう。また、いまはそれぞれの地域社会がみずから世界と結ばれていく時代でもあります。そうした刺激によって生活文化のルネッサンスを加速してゆくことが期待できると確信します。

提案と選択、市民文化と企業文化

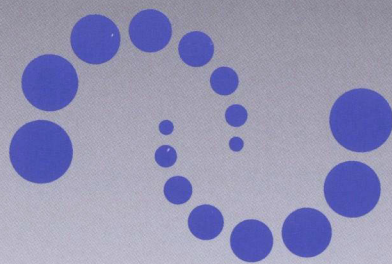
生活文化のルネッサンスをもたらす決定的な鍵は生活者の手中にあります。新しいライフ・スタイルは、供給側からの生き生きとした提案を、生活者が自らのイメージにしたがって選択し、創造的な組み合わせをたのしむことによって生み出されるものが多いのです。生活文化はまさに人間の精神の交流のなかから生まれるものであり、日本人の精神文化のなかにある共通の価値観が日本の生活文化を成り立たせているとあってよろしいでしょう。

この点で重要な役割を果たすのが情報であります。高度情報化社会の目標はひとりひとりの人間の生活の質をそれぞれの年齢・階層別に最大に高め、最大の精神的満足をもたらすことに求められるべきである以上、ハイ・テクはハイ・タッチのためにあると考えるべきです。ニューメディアは、生活者と供給側の提案と選択をめぐる対話を双方向化し、活発化するためにこそ積極的に活用されるべきだと考えます。

また、生活文化をめぐるイベントは、生活者と供給側の出会いの場として、たしかなイメージ、精神、思考方法を基礎にして、双方が深く満足するような心の触れ合いを求めるものでなければなりません。双方の採算と満足はそこからおのずから生まれてくるはずです。

べつなことばでいえば、これからの生活文化は、いわば市民文化と企業文化の対話と交流のなかから創り出される性質のものであります。そこには比較生産費原理をこえた価値評価による産業の存立と発展の基礎が潜んでいます。美しく楽しく価値のある暮らしを創るために真に有効な貢献をできるかどうかによってこれからの企業や産業に対する評価も左右されることになるでしょう。また、生活者にとっては、生活のなかでの教養は、人間的深みのある交流の場であり、人間的な了解を形成し、世代と世代をつなぐものであり、生活文化の源泉であることも忘れてはなりません。

そうした認識のうえに立って、生活者にも、供給側にも、美しく楽しく価値のある暮らしを目指そうという意識がひろがり、生活文化のルネッサンスをめぐる活動が全国土で活発化し、「風格のある日本」が形成されてゆくことを念じてやみません。21世紀初頭までの20年間がこの実現のための日本の新しい挑戦の初期段階であると確信します。



生活文化フォーラム